

物見遊山の森

1170004 天羽 朝陽

高知工科大学 システム工学群 建築都市デザイン専攻

1. はじめに

私の出身地徳島県にある文化の森総合公園は、博物館、美術館、図書館をはじめとする様々な文化施設が集まる複合施設である。文化の森総合公園を現状の課題点から、ここだからこそできる「展示物」、「図書物」を見て、体験して、活動の賑わいが絡まり溢れ出す、そんな施設へと生まれ変わらせる。

2. 対象敷地

対象敷地は徳島県徳島市八万町に位置する、徳島県立文化の森総合公園とする。ここは向寺山の北側にあり、総合公園全体としては約40mの高低差がある。施設の背後に広がる山は北東に開けたすり鉢状地形をしている。施設北側に流れる園瀬川が、住宅団地との干渉帯になっている印象を受ける。



図1 対象敷地位置



図2 対象敷地衛星写真

3. 現状

3-1 多様な施設の集合

大きく分けて図書館、総合館、文書館の3つの棟で構成されており、(図3)に示すように総合館には4種の施設が入っている。多くの館種が集まるこの環境は全国的に見ても数少なく、この施設の特徴の一つであるが、それぞれの機能が四角い箱の中でお互いに影響し合うことなく、独立して存在している。これでは同じ敷地内にこれらの施設が建っている意味は小さいと考える。

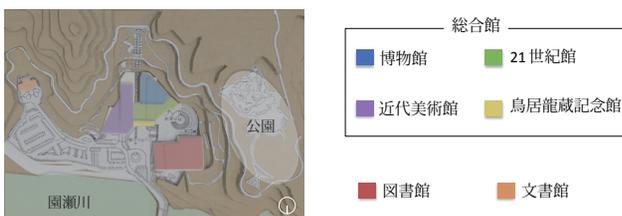


図3 既存館の館種と配置

3-2 豊富な自然環境と園路

施設の背後の森には園路が張り巡らされており路地の様な道幅が狭い所も見られる。自然との距離が近く子どもにとっては冒険心をくすぐられるような空間である。しかしあまり使われている様子は無く、通路の役割を果たしているだけである。



図4 自然と園路

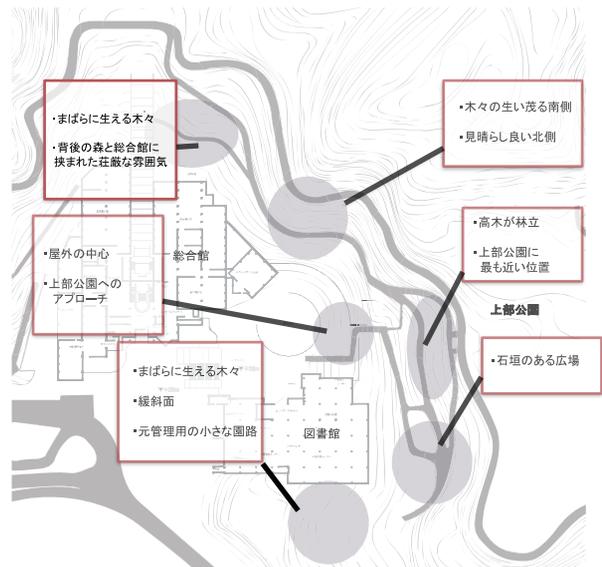


図5 場所特性

4. 設計

4-1 方針

方針としては現状の活かされていない、背後の森の各場所特性に呼応するような計画及び、多様な館種が集まることによってできるお互いに干渉し合う様な施設の計画を行う。また敷地の場所性を最大限活かすこととし、場所ごとに異なる表情を持つテーマパークのような施設を目指す。具体的には、既存館への減築と増築を行う。

4-2 減築と増築

・減築

総合館には3階に来館者の活動スペースがある。2階展示室がメインのため、この室を利用する人以外の目に触れることがない。さらに、3階にあることは利用者側も気軽に利用しにくいと考える。

また、研究者の仕事場も3階にある。研究者が1日の大半を過ごすことを考えると、背後の森の中でより研究に没頭できるような空間づくりができるのではないかと考える。以上の点から3階にあるこれらの室を減築し、屋外化する。

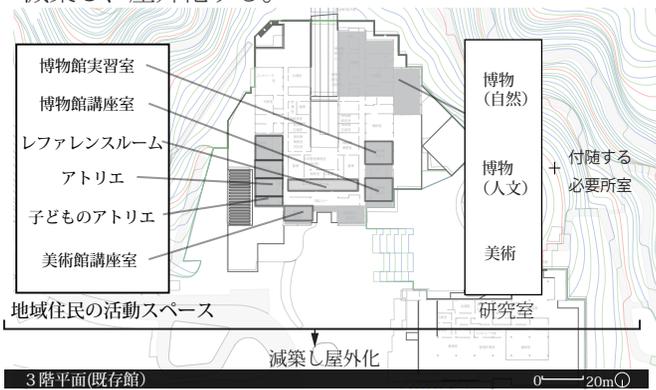


図6 減築対象の室

・増築

減築した室と、新たに展示室、企画展示室を背後の森に増築する。既存館の延長でありながら、性質の異なる新たな人の居場所をつくる。

4-3 機能整理

①既存館の空間の大部分を構成する要素をもとに展示物は白を基調、図書物は木を基調とした異なるボリュームに機能を入れていく。

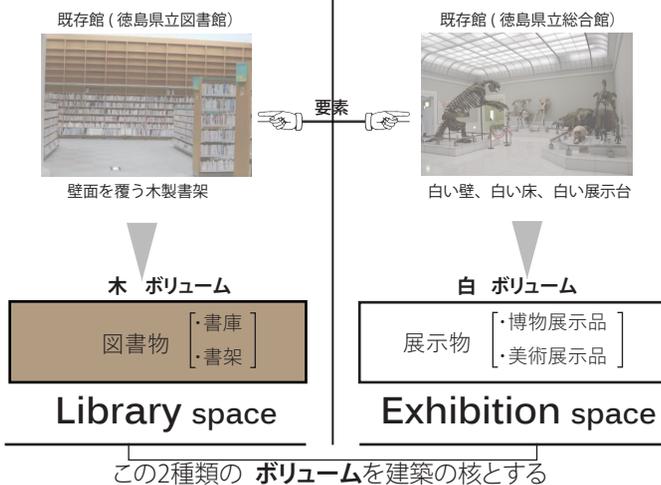


図7 既存要素をもとにした建築の核の決定

②既存館3階から減築した地域住民の活動スペースを両ボリュームに散りばめていく。元の図書館、博物館、美術館というくりを取っ払って機能を再配置していく。

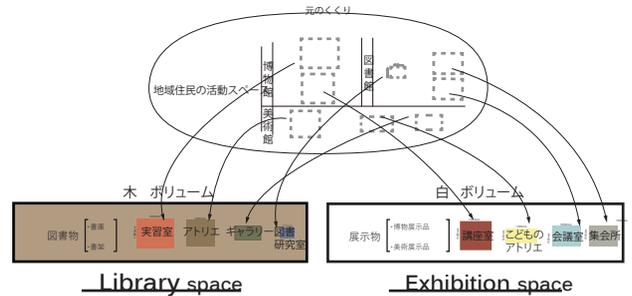


図8 機能再配置

4-4 ダイアグラム

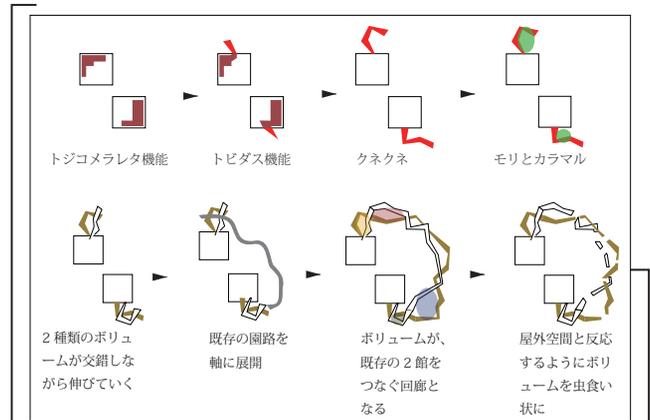


図9 形態変化プロセス

大きなスケール

場所特性に合わせ形態を変化

図5より既存の園路や、整備されている所またはされていない所の、場所特性を活かしながらボリュームを配置していく。

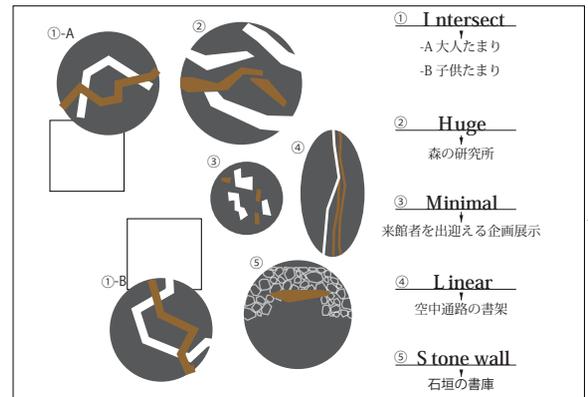


図10 場所特性による最終的な形態変化

小さなスケール

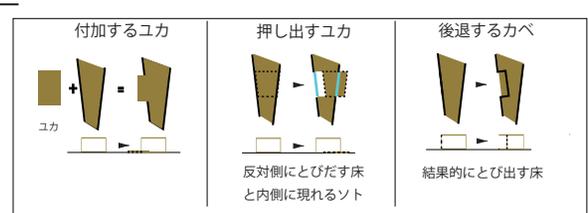


図11 3パターンの飛び出す床

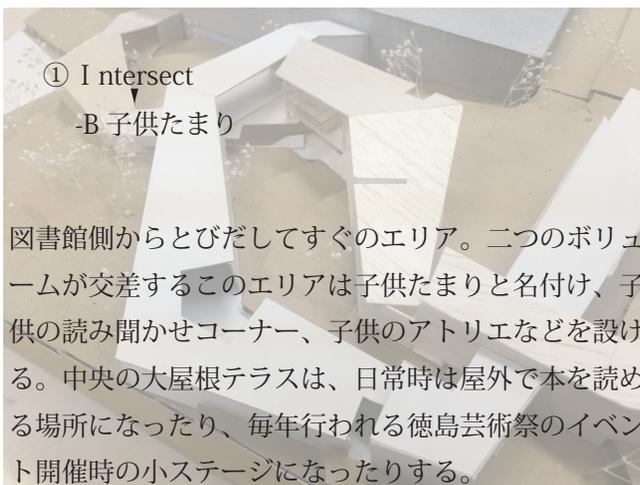
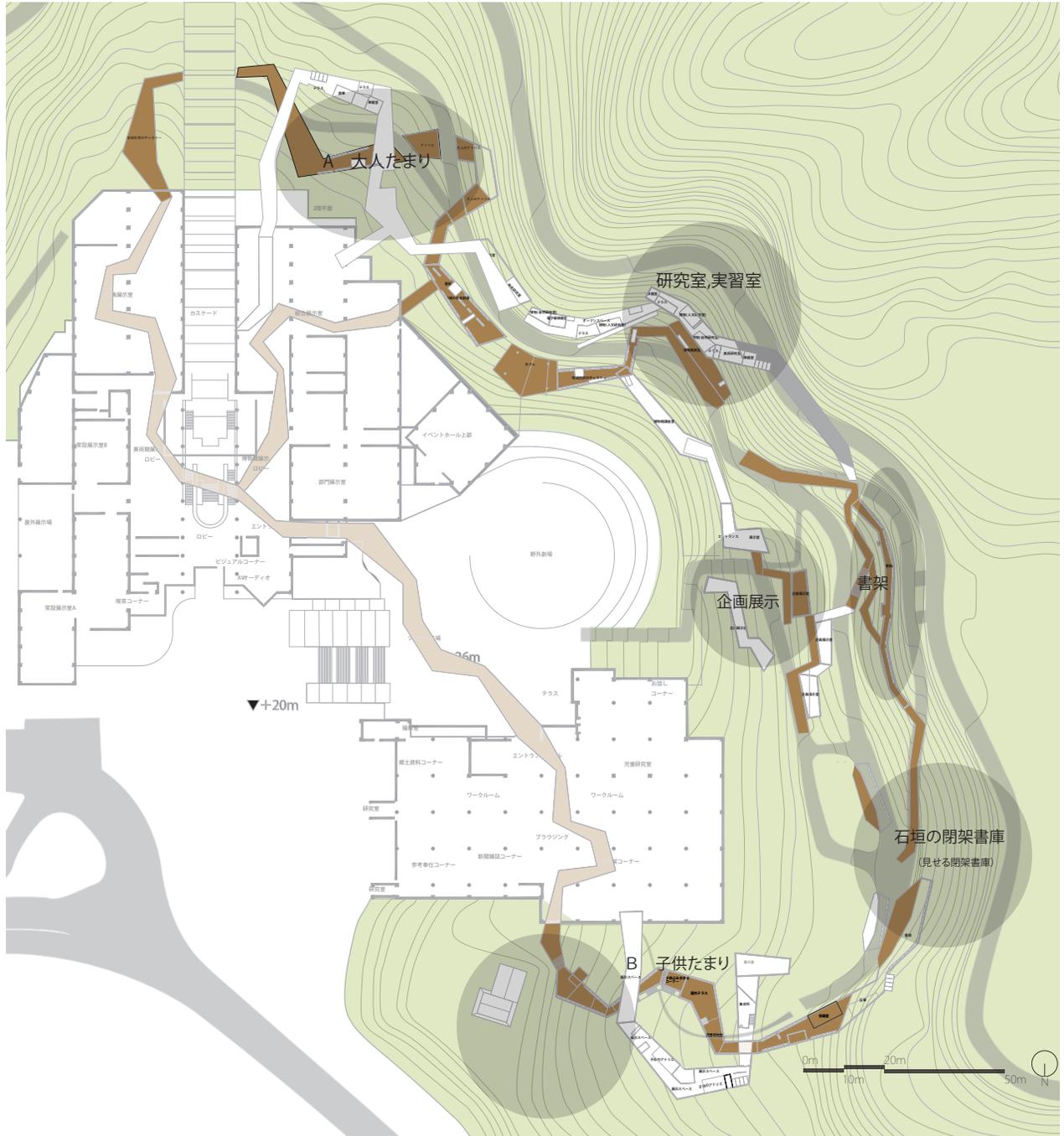


図 13

② Huge
▼
森の研究所

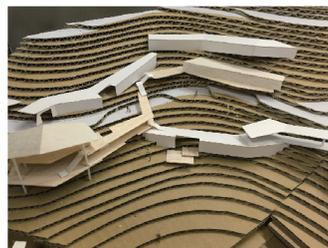


図 14

木の生い茂るエリアに建つ研究所。来館者の動線と研究者の動線を分けつつ、森の木々を干渉帯にして近くにボリュームを配置する。これにより研究者は研究に没頭でき、来館者は研究の様子を垣間見ることができる。

カフェ



図 15

木の生い茂るエリアと開かれたエリアの境目に建つカフェ。落ち着いて自然に心癒されたい気分ときは森の方を見ながら休憩できる。すっきり開放的な気分ときは施設全体を見渡しながら休憩できる。

地域の古本部屋

地域の住民がそれぞれ古本を持ち寄ってこの部屋に集める。この部屋は住民自身がつくりあげる。一冊本を寄付すると代わりに一冊持ち帰ることができる。読まなくなり、捨てるつもりだった本はこの部屋に並べられ、次の人へとつながっていく。

③ Minimal
▼
来館者を出迎える
企画展示



図 16

上部公園に向かう屋外のエントランス部分である施設中央の園路入り口にあるのは、企画展示室。ガラス張りのボックスが様々な方向に向いて訪れた人を出迎える。既存館でも現在行われている、一定の時期ごとに設けたテーマで展示物を入れ替えていき、この施設の顔となるような場所を目指す。

④ Linear
▼
空中通路の書架



図 17

高木が林立する間を細長いボリュームがぬうように建つ。斜面上に直接建つのではなく、鉄骨の柱でボリュームを浮かせ、空中通路のような書架とする。出窓の部分には小さなたまり場を設け、高木の中で浮いているような場で本に出会う。

⑤ Stone wall
▼
石垣の書庫



図 18

既存の石垣の一部をくり抜き、書庫へと生まれ変わらせる。既存館の閉架書庫の機能の一部を移し、今まで見えていなかった図書を「見せる」ことで知の財産を可視化する。下の二段は古地図や古文書などの貴重資料、上段は劣化の著しい、除籍対象の図書を入れる。下段の貴重資料は図書館員に申し出ることによって図書研究室で地域住民は閲覧することができる。

5. まとめ

既存館の豊富な館種が集まる特徴とその周辺環境の特徴を十分に生かすことで図書と展示物がお互いに近い距離で干渉しあう新たな施設の計画を行った。また、それぞれの敷地で異なる表情を持つテーマパークのような施設となり、面白みに欠ける閉じられた既存の施設を開かれた施設へと生まれ変わらせた。